

# 大学が貢献できるアジアの女性のエンパワーメント

## How University Can Contribute to Empowerment of Women in Asia

金田 卓也<sup>1</sup>, 大澤 清二<sup>2</sup>, 荒井 芳廣<sup>3</sup>, 石井 雅幸<sup>1</sup>, 矢野 博之<sup>1</sup>, 下田 敦子<sup>4</sup>, 榮 光子<sup>4</sup>,  
上野 あき<sup>4</sup>, ウシャ アチャヤ<sup>5</sup>

<sup>1</sup>家政学部児童学科, <sup>2</sup>家政学部被服学科, <sup>3</sup>人間関係学部人間関係学科,  
<sup>4</sup>人間生活文化研究所, <sup>5</sup>人間文化研究科人間生活学専攻

キーワード: アジアの女性、エンパワーメント、タイ、スリランカ、ネパール

### 1. 研究の目的

女子高等教育機関である本学は、開学以来一貫して、女性の自立と地位向上に大きく貢献してきた。途上国において、とりわけ女性のエンパワーメントの重要性が強調されるのは、多くの地域において、未だ、女性は、男性と比較して低い位置に置かれているという現実と共に、家庭に留まっている女性の潜在的力に大きな期待が寄せられているからである。本研究では、広域なアジア諸国の中でも、これまで本学における研究蓄積の大きいタイ・スリランカ・ネパールの3ヶ国を対象とし、それぞれの国における女性のエンパワーメントの方向性を明らかにする。

### 2. 活動実施報告

#### (1)タイ

タイでは北部山地民であるカレン族の伝統衣服製作技術教育指導プログラムの開発を行ってきた。平成23年度は、11月から翌年3月にかけて、タイの北部(チェンマイ県ドーイサケット郡)のM中学校の協力の下、カレン族女子(14名)を対象として、開発したプログラムの試用を行った。指導者は本プロジェクトにおける協力者であるカレン族女性Rさんに依頼した。プログラムは、学校の職業教育課程に導入され、毎週木曜日、3時間、20回に亘って実施された。終了後には、指導者、学校長らとプログラムの内容について協議した。その主な内容を以下に記す。

・これまで伝統的なカレン社会においてしか伝承されてこなかったカレン族の衣服製作技術の習得過程をプログラム化し、学校教育、特に職業教育課程において実施したことの意義は大きい。本プログラムを活用することにより、学習者は、限られた時間内に効率よく、合理的に確実に伝統衣服

製作技術を習得することが可能である。

・学習者らは手に職を付けるための手掛かりを得たであろう。

・一方、指導者については：本プログラムを活用することで、カレン社会における伝統衣服製作技術に習熟した女性には、指導者としての職を求められることが期待されるであろう。

カレン族社会においては、伝統衣服製作技術の伝承者は女性であった。本プロジェクトにより、科学的に裏付けされた、一般化可能なプログラムを開発し、これをカレン族女性らに活用してもらうことで彼女たちの自立支援に繋がると期待している。

#### (2)スリランカ

スリランカでは、女性の労働者を対象にした。調査地は北西部州の農地、西部州の繊維製造工場、製陶工場、ダンボール製造工場の4か所であった。労働者の労働環境を参与観察と科学的手法を用いて行い、労働者の労働環境の現状と問題点の発掘を試みた。科学的測定項目は、粉じん等の空気の汚れ、採光・照明、臭い、温度・湿度、水質(大腸菌、鉄、六価クロム、フッ素、遊離シアン)の5項目である。インフラ等の設備、人間工学に基づいた作業備品の使用と設備の有無、水飲み・手洗い場・排水・トイレ等の管理、ネズミ・衛生害虫等の5項目については参与観察により、映像と調査者の記述によってデータを保存した。労働強度の計量については、藤田忠の労働強度測定法を基に、心理-精神的作業評定尺度、生理-肉体的作業強度を計量すべく、質問紙調査表を作成し、労働者に質問紙を配布した。また、労働者の生活環境を探るために、労働者の自宅にてその様子を画像と調査者の記述により保存した。今後は得られたデータ解析するつもりである。



写真1 製陶工場で働く女性たち

### (3)ネパール

前プロジェクト報告書でも示したように、ネパールの高学歴女性のポテンシャルはきわめて高い。本研究では、カトマンドゥ大学大学院で環境教育の修士課程を修了したKPさん(27)を対象に面接調査を行った。彼女は在学中に結婚し、昨年秋に第一子を出産したばかりである。今年の2月には若手研究者交流プログラムの一環として来日したが、まだ6ヶ月足らずの乳児を置いて来られるという背景には、嫁ぎ結婚後も嫁ぎ先の夫の家族からの大きなサポートがある。女性の勉学継続には家族の理解が不可欠であることはいまでもない。

2月にはネパールでの現地調査を行い、KPさんも含めて、大学院で学ぶ女性たちと会うことができた。KPさんならびにトリブバン大学大学院生のJAさん(27)を被験者としてインタビュー調査を行った。ここでは発展途上国における女性の高等教育への就学状況に焦点化した。補足的に通訳を行ってくれたSS(39)さんも現在語学学校で日本語を勉強中であり、年代的にも対照的な事例としてインタビュー調査に厚みをもたらしてくれた。

配偶者と乳児の実子を持ちながらもなおかつ大学院に学び、本研究所プロジェクトにも積極的に取り組んでくれるKPさんについて、経済的側面や社会的地位での上昇という目的意識もさることながら、それ以上の学問への探究心や自己実現を明確に軸として持っている強みが見出せた。この点、同様に未婚にして大学院生として学ぶJAさんとの対照でとらえても、ネパール若手女性の中にあって大きく逸脱した生き方ではなく映る。

また、かなり裕福な社会階層に属し子どもも成

長して落ち着いているSSさんも、経済面や社会的意味ではない部分で自己実現の一環として現在の語学への取り組みの強いインテンシブがうかがえた。

### 3. 研究目標の達成状況

本研究では、タイ・スリランカ・ネパール、それぞれの国におけるこれまでの現地調査の蓄積があったために、女性のエンパワーメントに焦点をあてた調査も、短期間に効率よく進めることができた。発展途上のアジアの国の中でとりあげた3ヶ国の社会的・文化的違いを踏まえた上で、女性のエンパワーメントを進める上での問題点を整理することができた。

### 4. まとめと今後の課題

アジアの女性の自立支援といっても、本学は教育機関であり、援助のための機関ではない。従って、本学が可能な支援というものは、資金や物資を対象国に送ることではなく、それぞれの地域の持続可能な発展に寄与できる学術的知見の提供である。本研究プロジェクトの結果に基づき、タイでは衣服製作技術、スリランカでは労働環境、ネパールでは教育といった各分野における本学の学術的知見を提供し、女性のエンパワーメントに向けた具体的な支援方法を提案することが次の課題である。

対象とした女性たちの年齢や社会的地位が異なっても、女性として直面する共通の問題というものがある。それは、ある意味、日本の女性の問題にも共通することであり、その意味でも、女性主導による積極的な研究交流が不可欠であるように思われる。

### 5. 研究成果

[1] 榮光子. 南アジア農村女性の生活問題発掘調査. 社団法人日本家政学会第63回大会. 和洋女子大学. 2011. p. 68.

[2] 榮光子. 南アジア農村女性の問題発掘調査からフェアトレードを考える. 社団法人日本繊維製品消費科学会 2011年次大会. 武庫川女子大学. 2011. p. 143.

[3] 公開講演 平成24年2月21日(火) 10:30 ~ 12:00 大妻女子大学 千代田校 171 教室.